主日の福音 2024/12/25(No.1331)

主の降誕（日中）(ヨハネ 1:1-18)

民のところに来た「言」を私のどこに置きますか

「万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。」（1・3）昨晩の夜半のミサで、あなたの目にはこの幼子イエスはどのように映っていますかと尋ねました。あなたが言い表した信仰告白と、「万物は言によって成った」というヨハネの信仰告白は、うまく一致するでしょうか。

福音書が語るイエス様の一生の中で、お生まれになったイエス様を待ち構えているのは、穏やかな日々ではありません。羊飼いや占星術の学者の訪問も束の間、ヘロデから命を狙われます。それで幼子を連れて母マリアと養父ヨセフはエジプトに向けて出発しなければなりません。

エジプトへの旅と、エジプトからの帰還の旅も、きっと苦難の連続だったでしょう。教皇フランシスコは、聖家族のエジプト避難を「世界難民移住移動者」になぞらえて説明されました。エジプト避難の旅は、安全の保障もない、危険な旅だったのです。

さて教皇フランシスコは、12 月 29 日から来年の 12 月 28 日までを「聖年」と定め、私たちに「希望の巡礼者」となるよう促しています。幼子イエスを抱きかかえて旅立った聖家族は、イエス様と共に旅をしたので、最初の「希望の巡礼者」でした。私たちも、イエス様とこれからの聖年を過ごしていくなら、「希望の巡礼者」になれると考えます。

では、どのようにしてイエス様と共に聖年を過ごしていけば良いのでしょうか。今日の福音朗読、ヨハネ福音書の第 1 章が教えてくれています。それは、万物をお造りになった「言（ことば）」であるイエス・キリストを心に収めて日々を過ごすということです。

「言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。」（1・11-12）神のことばであるイエス・キリストを受け入れた人は、希望のうちに日々を過ごすことができます。たとえそれが、見た目には不安な日々であっても、希望を失うことはないのです。なぜならイエス・キリストを、日々心に収めて過ごすからです。

砲弾が飛び交う戦場にあっても幼子は母の胸で休みます。同時に母親は、幼子がそこに居ることで安心できます。私たちがミサに来て、聖書の朗読からみことばを持ち帰り、それを保って一週間を過ごすなら、私たちはどんな困難の中でも希望があります。どこかに巡礼することはなくても、イエスと共にいる生活は「希望の巡礼者」なのです。

みことばとして留まってくださるイエス様が「希望の源」であるなら、あなたはその「希望の源」を、心のどこに置きますか。不安な日々、危険と隣り合わせの仕事、余裕がなくいつも仕事に追いかけられる。こうした中で、神のことばであるイエスを、あなたは心のどこに置きますか。もう一度馬小屋のイエス様を眺めながら、自分の答えを出しましょう。

聖家族(ルカ 2:41-52)